

# 社会的実践としての説明的文章の読みの学習

## —特徴的なレトリックから言外の意味を推論する学習の一考察—

上越市立南川小学校 小川 高 広

### 1 問題の所在

テキストを批判的に読む目的とは何か。野呂（2009：20）は、批判的談話分析の目的を次のように説明する。「権力をもつ談話に惑わされない批判的な読みの可能性を呈示し、読者にパワーをつけるすべを提供しよう」とするもので、「社会変革」を目的とする。予測困難な社会状況の只中であって、国語科では、テキストの送り出すメッセージを批判的に検討し、社会を変革、創造する力を育てていくことが目指される。

では、説明的文章の批判的読みの学習は、そのような力を育てているだろうか。澤口（2018：52）は、二つの問題を指摘する。「一つは、国語科でありながら、言葉への着目、分析を通して批判的言語意識を涵養していないこと、もう一つはクリティカルな読みでありながら、社会・文化的な要素を廃するという脱文脈化が見られること」である。例えば、教科書レベルでは、テキストの形式や工夫を学習し、評価する学習指導の提示にとどまっており、読みはおのずとテキスト内に閉じられる。このような状況を乗り越えていくためには、言葉に着目し、社会・文化的コンテクストを賦活しながら言外の意味を推論し、評価していく社会的実践としての読みが求められる。学習者はこうした読みの経験を経て、「権力のもつ談話に惑わされない」批判的な読みの力を身に付けることができると考える。

さて、社会的実践につながる批判的読みの先行研究では、澤口（2018）がある。これは、小学校高学年を対象とした、教科書教材を改編した新聞の投書の比べ読みの実践研究である。異なる立場の投書について、「主張の理由づけ」を読み取らせたり、「投書の背景にある書き手の経歴や考え方」を推論させたりしている。しかし、学習者に「課題の意図が伝わらない場面が多かった」と実践上の課題を述べる。その原因として考えられるのは、大きな問いを提示したため、細部への着目がおろそかになった点である。小学校段階では、まずテキストの細部への着目を出発点とし、そこからマクロな視点の批判的読みへ広げていくことが必要であろう。

また、古賀（2015：111）は、中学校段階における論証の批評的読みを拡張した枠組みとして、イデオロギーを批評する読解方略を指定している。そして、テキストの背景にある「排除された他者」「語りえぬもの」を特定する方略の一つに、「事実主張の論証部分における高いレトリック性への着目」を提出している。これは、論証構造の把握から、論証を際立たせているレトリカルな表現、すなわち、相手を説得するために高度に修辞された「文彩、論法、言説の配置」といった特徴的なレトリックを学習者が見出すというものである。言外の意味を推論する学習を成立させるうえで有効な視点と言える。その一方で、「どのような問い」を立てるかという課題を挙げる。方略を中学生へ適用するには、さらなる課題が残されている。

以上の検討を踏まえると、小学校段階において社会的実践としての説明的文章の学習を成立させるためには、授業者による丁寧な足場掛けが必要ことが分かる。例えば、古賀が中学生に求めている論証の把握と特徴的なレトリックの特定については授業者等が行うこととして、小学生である学習者には、特徴的なレトリックを検討することを通して言外の意味を

推論するという適用の方法が考えられる。本研究では、このような仮説に立って小学校段階における社会的実践の方途を探っていく。

## 2 研究の目的と方法

本研究は、小学生を対象とした、言外の意味を推論しテキストの評価する学習における、特徴的なレトリックに着目した課題設定の有効性を検証することを目的とする。

研究の方法は、まず対象とするテキストにおける特徴的なレトリックを明らかにするために、テキスト分析を行う。次に、明らかにした特徴的なレトリックを基に、言外の意味を推論する学習課題を設定する。最後に、授業実践を分析し成果と課題を明らかにする。研究の対象とするテキストは、平成 27 年度版光村図書 6 年「自然に学ぶ暮らし」（石田秀輝）、学習者は小学 6 年生である。

## 3 テキスト分析

### 3. 1 方法

特徴的なレトリックを特定するために、言語的側面だけでなくテキストを取り巻く状況や書き手等のコンテクストを含めた分析を行う。本研究では、テキストを分析する観点としてキャンベルら（2003）の「七段階の叙事的分析」を援用する。すなわち、「1 テキストの目的を知る、2 テキストの話し手のペルソナを知る、3 テキストの聴衆を知る、4 テキストの論調を知る、5 テキストの構造を知る、6 テキストの裏付け素材を知る、7 テキストのレトリック戦略を知る」である。1～3 はコンテクストの分析、4～7 は言語的側面の分析と見なされる。テキスト内外からの分析によってレトリック評価の準備が整う。

コンテクストの分析においては、筆者の他の著作を比較参照しながら「テキストの目的」「発話主体」「聴衆」を検討する。

言語的側面の分析では「テキストの論調」と論証の検討を行う。論証の検討によって、テキストの構造や裏付け、レトリック戦略を把握する。本研究では、論証の把握のために間瀬（2009）を援用する。間瀬は、説明的文章の論証を捉えるためにトゥールミンの論証モデルを用いている。そこでは「主張」「根拠」「論拠」の関係性を中心に分析し、適宜「裏付け」「反証」「指標」の視点を取り入れている。また、論証を分析する文章の単位を、文や段落レベルの「ミクロ構造」、段落の集まりから見た「メゾ構造」、文章全体を範囲とした「マクロ構造」としている。他方、難波（2012：64）は、間瀬（2009）を引きながら「マクロ構造の論理をつかむことが一番大事である」と述べる。そこで本研究においては、マクロ構造における論証について、「主張」「根拠」「論拠」の関係性を中心に分析し、テキストの構造や特徴を把握する。

次に、論証構造の把握から特徴的なレトリックを特定していく。間瀬（2009：110）は、「説明的文章教材は、妥当な推論や誤謬という観点から見れば問題をはらんだものばかりである。

（中略）正当な推論に到達するという批判的思考の本来の目的から見れば、むしろ埋め込まれた論証を取り出す、暗黙性を補うといった観点から読みを行う必要があると思われる」と述べる。つまり、論証における暗黙性や飛躍は、そこに何らかの論証を際立たせる「文彩、論法、言説の配置」等があると考えられる。これによって特徴的なレトリックを特定していく。

### 3. 2 コンテキストの分析

発話主体は筆者である石田秀輝である。石田はネイチャーテクノロジーの研究と製品開発を進める工学博士である。テキストの脚注には「工学者。特に、環境に負荷をあたえないものづくりについて研究している。」とある。初期の著作には『自然に学ぶ粋なテクノロジー』（化学同人；2009）と『地球が教える奇跡の技術』（詳伝社；2010）があり、以降も同様のテーマで著作を送り出している。本テキストは初期のものを含むこれまでの著作を基に書き下ろした文章と考えられる。本研究では初期の 2 作をテキスト分析の際に比較資料として用いる。

次に聴衆について検討する。テキスト内容は、人間の開発による資源利用を問題視していることから、資源開発を進めてきた先進諸国一般人が想定読者としてまず位置付けられる。そして、「日本に生きるわたしたち」と表記があることから、読者を日本人に限定できる。さらに、「おじいちゃんに……プレゼント」からは、読者を子どもと焦点化できる。テキストの置かれている状況を鑑みれば、検定教科書という性格上、読者が小学 6 年生であることが明確である。

以上の分析から、テキストの目的を「日本の小学生に対して、資源減少という問題点を乗り越えるために、自然の仕組みに学ぶ新しい暮らし方を呼び掛ける」と措定できる。

### 3. 3 言語的側面の分析

#### 3. 3. 1 テキストの論調

次に、テキストの論調について分析する。論調とは、テキストの主題に対する態度と読者に対する態度である。主題に対しては、地球の資源が減少しつつある現実について不安を喚起する序論部ののち、新たな暮らし方の可能性を提案しており、説得の効果を生み出している。読者との関係は、専門家と小学生という関係性である。外国の事例や身近でない生き物の特徴についても図示しながら説明しており、理解を図っている。また、「風を感じてみるのもよいかもしれません」「プレゼントするのもいいですね」と砕けた言い回しを用いている箇所がある。このようなことから、専門的な立場による論理的な説明を基本としながらも、身近でない事例については図説したり読者に語りかける口調を用いたりして、読者の説得を試みていると言える。

#### 3. 3. 2 マクロ構造による論証の検討

まず、文章構成を概観し、主張を特定する。テキストは全 9 段落からなる。

序論：地球の資源が少なくなっている。私たちは、自然の仕組みをうまく利用して生きている生き物に学ぶことができるのではないだろうか。(1～3 段落)

本論：「シロアリの巣」「アワフキムシのあわ」「ベタのあわ」「トンボの羽根」を応用した資源を節約した生活の具体例や可能性の提示。(4～8 段落)

結論：自然に学び、新しい暮らしの在り方を考えていくことによって、資源を守りいつまでも暮らしていける社会ができる。(9 段落)

序論部では、「地球の資源が少なくなっている」現状を捉え、「三十八億年もの間、生き物たちは、さまざまな環境に適応しながら生きてきました。人間以外の生き物は、電気もガスも使っていません。自然の仕組みをうまく利用しながら生きています。私たちの生活にも応用できるのではないかと思います」と、生き物が電気やガスを使わず環境へ適応して生きてきたことを根拠に、人間の生活への応用の可能性を述べる。そして、3 段落で「自然の仕組みをうまく利用するとは、どのようなことでしょうか」と問いを提示している。本論部では、生き物の仕組みとそれを応用した人間の暮らしについて事例や可能性を述べる。

結論部では、「自然の仕組みを生かした新しい暮らし方を、一からつくっていくことができるのではないのでしょうか」と 1 段落で述べたことを再び主張しており、双括型の文章となっている。

次に、主張を導出する論証をマクロ構造で把握する。

〈根拠〉人間以外の生き物は、三十八億年もの間、さまざまな環境に適応しながら生きてきた。

〈論拠〉生き物の仕組みに学ぶと、資源を節約できる。

〈主張〉人間は生き物に学ぶことによって、資源を守りいつまでも暮らしていける社会ができる。

三つの論証の要素はすべて明示され、生き物の生態から人間の生活を類推し、主張を導出している。また、論拠の裏付けとして 4 種の生き物の仕組みとそれを応用した暮らしの実際や可能性を例示している。例証によって帰納的に主張を導出しており、説得力が高い。

では、暗黙の前提や論証の飛躍は指摘できるだろうか。まず、論拠における類推に着目すると、「三十八億年もの間」「適応してきた」生き物は多種多様であるのに対し、人間は一つの種と言える。生き物の中には、「環境に適応」できずに淘汰された種もあろう。ここにまず論証の飛躍が見られる。また、「適応＝節約」という類推に飛躍が指摘できる。

次に、主張における暗黙の前提を検討する。筆者は、「いつまでも暮らしていける社会」を求めているが、そこには人類が種をつなぐことを善とする考え方がある。また、主張の背後に、「環境テクノロジー」を推進する筆者の意図が推論できる。「新しい暮らし方」は、環境ビジネスとも密接なつながりをもっている。このような意図を暗黙の前提として指摘できる。

このように主張を導出する論証において、批判的に読む視点を複数指摘できるが、高度に修辞されたレトリックについては、ここでは明確に見出すことはできない。

次に、主張が再提示される結論部において、序論部との差異が指摘できるのでここで検討したい。テキストではマクロ構造の論証で示した主張に続いて、次の記述が付加される。

9 段落後半部：多くの自然に囲まれた日本では、昔から、自然とうまく付き合いながら暮らしてきました。そんな日本に生きる私たちだからこそ、自然の仕組みを生かした新しい暮らし方を、一からつくっていくことができるのではないのでしょうか。

結論部において「日本」という言葉が初めて用いられている。この主張を論証構造で示す。なお、「( )」は稿者が補った論拠である。

〈根拠〉多くの自然に囲まれた日本では、昔から、自然とうまく付き合いながら暮らしてきた。

〈論拠〉(過去にできたことは、未来にもできる。)

(成果を収めた者こそ、新しいものを創造すべきである。)

〈主張〉日本に生きる私たちだからこそ、自然の仕組みを生かした新しい暮らし方を、一からつくっていくことができる。

根拠は明示されているが、論拠は暗黙となっており補う必要がある。ここでは二つの論拠を推定した。また、根拠の適切さについて目を向けると、裏付けが述べられておらず確実性は定かではない。日本が他国と比べて自然に多く囲まれている事実や、日本が昔から自然と付き合いしてきた事実を示す必要があろう。

では、このように論証の飛躍をしてまで「日本」を反復して用いる意図は何であろうか。著作を参照するとそれが理解できる。石田(2009:5)には「日本人にとって自然は足元などにはない。自然は私たちと同じ目線に、いやそれより高いところにある。だからこそ神道では八百万の神、仏教では山川草木国土悉皆成仏で示されるようにあらゆるものに神が宿り、あらゆるものが仏性をもっていると考えている。そのような考えが、具体的な庶民の文化に

なったのが、江戸時代の「粋」ではないかと思う」とある。また、石田（2010：229）においては、イギリスの産業革命を「自然観との決別」と捉えたうえで、「粋」は「利己社会」の対極にある「利他社会」であり、自然と和合し、敗者を作らず、足るを知る、侘び寂の文化であったとする。このように、「日本」という表記には、日本人の自然観を反映したかつての暮らし方を理想とする筆者の思想性が認められる。すなわち、「日本」は「イデオグラフ」に該当する考えられる。「イデオグラフ」とは、「思想の表象であり、イデオロギーが集約された語」（古賀；2015：110）を意味する。妥当な論証とするためには、論拠を述べたり、根拠の裏付けに「江戸時代の「粋」」に関する情報を明示したりする必要がある。論証の飛躍の検討から、「日本」を筆者の思想へ導くために用いた特徴的なレトリックとして特定することができる。

### 3. 3. 3 裏付けの吟味

次に、マクロ構造による論証において、裏付けとして示される 4 つの事例が論拠の根拠となっているか。また、主張を導出するための妥当性があるかを明らかにするために、論証構造を図示して検討する（図 1）。

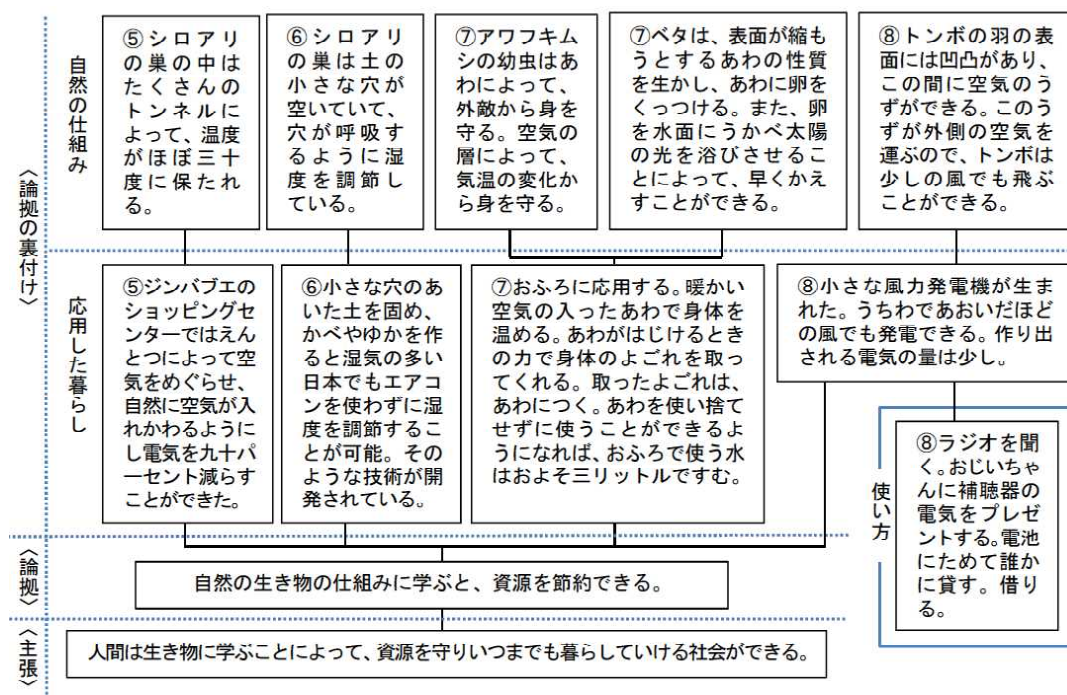


図 1 裏付けに関わる論証構造図

論拠の根拠に当たる裏付けは、「自然の仕組み—応用した暮らし」という「原理—応用」の結束構造の下、4 種の生き物が取り上げられている。多様な生き物や仕組みがバランスよく取り上げられていると言える。

応用した暮らしでは、「えんとつ」は実用化されているが、穴の空いた壁や床、お風呂の泡、風力発電機は開発途上にある。応用される場面では、5～7 段落は、ショッピングセンターの空調、家の壁や床、お風呂という想定読者にとって身近な生活場面と言える。対して 8 段落は発電となっており具体的な生活場面ではない。そこで、これを補うように「ラジオ」「補聴

器の電気」「電気の貸し借り」が生活場面の事例として取り上げられる。ここで論証構造図を確認すると、5、6、7 段落は、「自然の仕組み―応用した暮らし」の論理構造であるのに対し、8 段落は、「自然の仕組み（トンボの羽）―応用した暮らし（風力発電機）―電気の使い方（ラジオを聞くなど）」という 3 段階の接続構造となっている。そして、「電気の使い方」は論拠を裏付ける絶対条件ではないことが分かる。本来論拠部に接続する裏付けは「風力発電機」であるのに、あたかも「使い方」が論拠部と接続するように修辞されたものである。仮にこれを応用した暮らし方の事例と見なし結束性を検討した場合、「ラジオ」「おじいちゃんに補聴器の電気のプレゼント」等は、読者に身近な事例群からの逸脱が認められる。石田（2010）を参照しても、「トンボの羽の構造による発電機」の事例に「ラジオ」「補聴器」といった電気の使い方は見当たらない。このように論証における逸脱の指摘から、「ラジオ」「補聴器の電気」等を筆者が読者を説得するために用いた特徴的なレトリックと特定できる。では、これらのレトリックに筆者のどのような意図、思想性が推定できるか。次に学習活動の構想とともに検討する。

#### 4 学習活動の構想

論証を批判的に検討する学習について、間瀬（2009：110）は次のように述べる。「重要な箇所を選んだり、論証の要素のいずれかを指摘させたり、暗黙の前提を補わせたりすることでもよい」。このように、焦点化した課題設定が求められことから、複数指摘してきた特徴的なレトリックのうち、ここでは 8 段落の「ラジオ」と「おじいちゃんに補聴器の電気をプレゼント」を検討対象としたい。8 段落は以下の表記である。

8 段落：これらとは別に、自然の仕組みに学んで、エネルギーそのものを作り出す試みもなされています。これは、暮らしの中で使うちょっとした電気を自分で作る方法です。トンボの羽の表面には凹凸があり、この間に空気のうずができます。このうずが外側の空気を運ぶので、トンボは少しの風でも飛ぶことができます。この仕組みを使って、小さな風力発電機が生まれました。この風力発電機は、うちわであおいだほどの風でも発電できます。作り出される電気の量は少しですが、その電気でラジオを聞いたりおじいちゃんに補聴器の電気をプレゼントしたりすることができます。また、今日はあまり電気を使う予定がないから、電池にためたエネルギーをだれかに貸してあげる、明日はたくさん使いたいから借りるなどのやり取りもできます。

このレトリックを選択した理由は、「おじいちゃん」という言語選択に想定読者への期待が込められているため、読者自身が説得の効果を判断できること。さらに、事例相互の結束性を鑑み、事例選択の意図や筆者のイデオロギーを推論できると考えたからである。

では、筆者が「ラジオ」等を選択した意図はどのように推論できるだろうか。稿者においてレトリック評価を試みたい。ここで注意を払いたいのが、評価者の立場がレトリック評価に偏りを与えかねない点である。多様な推論を学習活動の中で交流させるためには、評価者自身が自身の解釈にもメタ的でなければならない。そこで、一つのテキストに対して三つの立場、すなわち、「好ましい主体の立場」「折衝された主体の立場」「対立的な主体の立場」を想定した上で、筆者の意図を検討する。次に示すのは、3 つの主体の立場における想定される反応である。

好ましい主体の立場：発電した少量の電気をラジオに使うことは、生活する上で役に立つ。ラジオは様々な場面で使えて便利だ。補聴器に電気を充電しておじいちゃんにプレゼントすればとても喜ぶだろう。生き物に

学んだ暮らしをすると資源の節約だけでなく人のためにもなる。

折衝された主体の立場：ラジオや補聴器が少ない電力で動くことを知った。しかし、私たちがラジオを使う機会は少ない。また、なぜ突然補聴器が登場したのか。筆者と関係があるのだろうか。確かに、高齢者は補聴器を使うことが多いかもしれない。筆者に「ラジオ」「補聴器」「子ども」に対する偏った見方はないだろうか。

対立的な主体の立場：ラジオの電力は読み手である子どもには身近ではない事例だ。また、発電しても補聴器の電気に使うことは稀だ。それをおじいちゃんにプレゼントするというのも回りくどい。どちらの事例も高齢者が意図されているように感じる。福祉の価値観を持ち出して、私たちを感情的に説得し、行動を促そうとしているのではないか。資源を節約する暮らしとはつながらない事例ではないか。

このように、特徴的なレトリックに多様な評価を下すことができる。特に、対立する主体の立場による評価では、「福祉の価値観」による説得に、高いレトリック性を指摘できる。

次に、学習活動を構想する。学習者主体の課題解決とするためには、学習者自らが論証を把握し特徴的なレトリックを見出し検討していく過程が望ましい。しかし、それは中学校段階で求められる力であり、小学生を対象とする本研究においては、当該のレトリックに関する部分テキストは授業者から提示することとする。

学習課題は、まず、8段落の電気の使い方の事例（下線部）を空欄とし、何を補うかと問う。学習者は、他の事例との結束性を検討し、類似性や想定読者や筆者のコンテキスト等を根拠に事例を推論する。推論した事例について理由を述べ合う中で、事例間の結束性や筆者と読者の関係性へ検討が焦点化していくと考える。

続いて、事例を明らかにし言外の意味を推論する。言葉への着目が最も高まる場面である。学習者は、テキストを取り巻くコンテキストを賦活させ、多様な推論を働かせる。テキストを評価する場面では、レトリックが用いられることの効果を肯定的、あるいは対立的な立場から評価する。テキスト内外から理由づけすることが考えられる。

## 5 検証授業の概要

検証するのは、小学6年の学習者15名を対象に行った平成28年2月の授業実践（全6時間。右図参照）である。学習者はこれまでに、事例間のつながりや主張、根拠、理由の整合性を観点とした説明的文章の批判的読みの経験がある。しかし、テキストの言外の意味を推論する読みの経験はない。単元名は「予想して読もう」、単元のねらいは、「筆者と読者の関係を考えながら、予想して読む」である。

- |     |  |
|-----|--|
| 第一次 | ①範読を開き、題名の検討をする。<br>②図の並び替えを通して、内容のだいたいをつかむ。<br>③主張と事例の関係をピラミッド図に整理する。 |
| 第二次 | ④8段落の事例部分を考える。<br>事例部分を知り、筆者の意図を推論する。<br>⑤筆者の文章を評価する。読者を想定して、事例を書く。    |

## 6 学習分析の方法

第4時と第5時の学習を対象に、言外の意味を推論しテキストを評価する様相を分析し、課題設定の有効性を検証する。分析の資料とするのは、学習者の記述と発話をトランスクリ



イブしたプロトコルデータとする。プロトコルデータの書式は、松本（2006：83-84）に準ずる。

## 7 学習分析

### 7. 1 事例部分の予想

以下は8段落で空欄とした事例の予想とその理由である。特徴的な記述を示す。

Is：（予想した事例）パソコン、スマホ、ドライヤーなどに使う。ミニ扇風機の電気、明かり、照明。（理由）「暮らしの中で使うちょっとした電気」と書いてあるから。あまり大きなものじゃなくて、小さいものだと思ったから。

Mi：（予想した事例）自転車を動かすことができる。（理由）説明文は、地球の資源は少なくなっていると書いてあるから。

Is は「暮らしの中で使うちょっとした電気」という記述を根拠に推論している。いずれの事例も学習者に身近な生活用品の事例を挙げている。この事例は、マクロ構造から捉えても「エアコン」「風呂」などが示す生活場面の事例とも類比関係にあると言え、妥当な推論と言える。Mi は、「自転車」を事例に挙げ、理由を「地球の資源が少なくなっている」としている。これは主張の前提を根拠として予想していると見られる。Mi は「自転車」について資源を使わない乗り物として挙げていることから、「電気自転車」と解釈できる。マクロな視点から事例を推論していると言える。この段階において学習者は、テキストの論証や事例の結束性を根拠に推論を働かせていることから、特徴的なレトリックとのコンフリクトを経験する準備が整った状態にあると言える。

### 7. 2 言外の意味を推論する様相

次に、問い「筆者はなぜ「ラジオ」や「補聴器」を事例にしたのか」に対して、学習者が言外の意味を推論する様相を分析する。以下に、特徴的な記述を示す。

Ya：ラジオは災害などで使え、補聴器は障害をもっている人に使えるから。

Ib：石田さんのおじいちゃんがいて、耳が遠いけど、ラジオが聞くのが大好きで、この事例を選んだ。石田さんの周りにおじいさん、おばあさんが多かったから。

Nh：筆者は自然に優しく、どんな人でも暮らしやすい社会をつくらうとしているから。昔に一步もどったところから始めよう。

Ko：ラジオは、昔の機械だし、おじいちゃんも、昔の人だったから、昔の方が、自然豊かだったということ、教えたいという気持ちがあったから。

まず Ya は、事例から自身の経験的コンテクストを賦活している。Ya の「ラジオ＝災害」、「補聴器＝障害者、高齢者」という経験的知識を基に説明するにとどまっており、批判的な読みには至っていない。一方、Ib は発話主体を捉えようとしている。筆者と事例との関わりを観点に、テキストが生産された状況を推論している。さらに、Nh では、発話主体からテキストの背後にある筆者の思想へ推論が至っている。Nh の「自然に優しく」はテキストの主張を捉えたもので、「どんな人でも暮らしやすい社会」は「ラジオ」、「補聴器」から高齢者などを推論したと考えられる。Nh はこれらを総合し、そのような「社会をつくらうとしているから」と事例選択の意図に迫っている。そして、Nh、Ko は、「昔に一步もどったところから始めよう」、「昔の方が、自然豊かだったということ、教えたい」と、テキストには明示されない「語りえぬもの」を推論している。この推論にはテキストの目的との隔たりが認められる。つまり、レトリックが論証構造から逸脱していることの証左である。さらに Nh は、学



習者間の交流場面において「筆者は自然に優しく、どんな人でも暮らしやすい社会をつくろうとしているから、この事例をね、つまり、ラジオとか、二酸化炭素を出さない、補聴器とかをあえて出して、おじいちゃんという高齢の方にも暮らしやすくしてほしいという」、「この人ね、昔の時代にもどったところから始めようとしているんだよ」(第4時2班)と自身の推論を強化している。

では、このような学習者の推論は妥当であろうか。これは著作の検討で明らかにしたように「江戸時代の粋」を理想とする筆者の明確な意図があった。特徴的なレトリックから言外の意味を的確に推論していると言える。さらに言えば、Nh や Ko の推論に「日本」という特徴的なレトリックの検討を統合することができれば、「日本の昔の暮らし」というような、テキストには明示されない筆者の思想、イデオロギーへも接近ができたであろう。

このように、論証構造から逸脱したレトリックを基に課題を設定した結果、言外の意味を推論する学習が成立したと認められる。

### 7. 3 テキストを評価する様相

最後に、学習者が相互作用場面においてどのようにレトリックを評価したかを分析する。

#### 【第5時 全体場面の発話】

14T この事例、いい事例だったなと思う人どれくらいいる？

((Nh1名が挙手))

15Nh 補聴器は、あれだけラジオはいい事例。

16T そんなにいい事例じゃない。

((その他14名が挙手))

((中略))

19Nh 「自然を一から」と言っているのに、テレビとか言ったり、なんかそういうハイテクなものを言っちゃうと、矛盾しているから、なんか一歩戻ったところで言ったら。

20T なるほど。生活も昔に戻すみたいだね。

21T ちょっとな？と思った人。Riさん。

22Ri これってなんか最初の方に「資源を節約」って「私たちは資源の利用の仕方を見直すのに、新しい暮らし方を一から考えていかなければなりません」てなんか、そういうのって、若い人とか子どもの人に伝えたいのに、なんでちょっと、おじいちゃんの補聴器って、圧倒的にお年寄りに／／-

23Hi ／／そうそうそうそう。

((中略))

32Ry もっと今身近な-

33T Ryさん。

34Ry 身近に使うものの方が-

35T 身近に使うものの方が納得／／する。

36Nh ／／スマホ。

37Is 補聴器そんな身近じゃない。

((中略))

43T Yaさんはどう？

44Ya 「ラジオ」はいいんだけど、「補聴器の電気」は「電気」の部分が少し分かりにくい。

45T ちょっとの電気をプレゼントなんだけど、補聴器をプレゼントするように錯覚するね。

46T でも石田さんはさ、おじいちゃんの補聴器の電気をプレゼントって言ったら、うんそうだなあ／／って納得してくれると思ったんじゃないの？

47Ib ／／え：：

48Yu え：：

49Ko え：：あんまり子どもの気持ちわかってないなあ。

Nh は、筆者の「ラジオ」などの事例を「よい」と評価した唯一の学習者である。19Nh において、前時からの自身の立場を根拠に「ハイテクから一歩戻った」事例でよいと述べている。Nh は、筆者の「昔の時代に戻る」という隠れた主張を支える根拠として「ラジオ」「補聴器」が「ア

ナログ」であると解釈し、結束性をもっていると評価している。テキストの言外の意味を推論した上で、特徴的なレトリックを用いることの効果を説明している。この主張が表しているのは、筆者の主張を無批判に肯定する「好ましい主体の立場」とは層が異なる。すなわちこれは、明示されたテキストの主張を批判的に読んだうえで肯定的に評価する読みの姿である。

一方、この事例を評価しない「対立的な主体の立場」の学習者が多数となった。例えば 22Ri は、「そういうのって、若い人とか子どもの人に伝えたいのに、なんでちょっと、おじいちゃん の補聴器って、圧倒的にお年寄りに」と述べる。これは、想定読者が「若い人とか子ども」と捉えたうえで、「ラジオ」「補聴器」は適切でないという主張である。そして 32Ry 以降、「もっと身近に使うものの方が」読者を説得できるとし、49Ko「子どもの気持ちわかってないなあ」と想定読者の説得に失敗していると評価している。これは「対立的な主体の立場」と言える。さらに、44Ya は「ラジオ」はいいんだけど、「補聴器の電気」は「電気」の部分が少し分かりにくい」と述べ、より精緻な視点から表現を分析しており、「折衝された主体の立場」と言える。

このように、テキストを評価する場面においては、テキストを無条件に肯定する「好ましい主体の立場」は認められなかった。その要因は、特徴的なレトリックの検討が学習課題として機能し、批判的な読みが駆動したためと考えられる。専門家の生産した権威のあるテキストに対して、自身の評価を表明することができたことから、社会的実践につながる説明的文章の読みの姿が認められたと言えよう。

## 8 成果と課題

本研究では、社会的実践としての説明的文章の批判的読みの学習の必要性から、小学生を対象とした言外の意味を推論しテキストを評価する学習について、課題設定の有効性を視点に実践的に検証した。本研究を通して明らかになった点は、以下の通りである。

- ・言外の意味を推論する学習の準備段階として、言語的側面及びコンテキストからテキストを分析した。マクロ構造の論証の検討から特徴的なレトリックを特定した。
- ・論証の飛躍から見出した特徴的なレトリックを問う学習課題とすることによって、言葉への着目が促された。事例選択の意図を検討する場面では、テキストを言語的側面及びコンテキストから分析し、言外の意味である筆者の思想性を推論する様相が認められた。
- ・テキストを評価する場面においては、筆者の主張、想定読者、事例の結束性などを根拠に、テキストを批判的に読む様相が認められた。言語的側面及び社会的・文化的コンテキストを賦活した読みが実現できたと言える。

本研究では、授業者による足場掛けによって小学校段階においても言外の意味を推論し、テキストを評価する学習が成立したことから、社会的実践につながる説明文学習の一つの可能性を示すことができた。今後は、学習者自らがマクロ構造の論証を把握から特徴的なレトリックを見出し、自覚的に検討していく学習について研究していきたい。

## 文 献

- 石田秀輝 (2009)『自然に学ぶ粋なテクノロジー』化学同人  
石田秀輝・新しい暮らしとテクノロジーを考える委員会 (2010)『地球が教える奇跡の技術』祥伝社  
古賀洋一 (2015)「説明的文章の方略的読みにおける批評性—中学校三年生教材におけるイデオ

- ロギー批評の試み』『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』64号, 103-112
- 澤口哲弥 (2018) 「思考力・判断力・表現力」時代の小学校国語科教材論—国語科クリティカル・リーディングの理論から」『初等教育カリキュラム研究』6号, 51-62
- 難波博孝 (2012) 「論理／論証教育の思想(4)— 論理と読むことの授業」『国語教育思想研究』4号 国語教育思想研究会, 55-66
- 野呂香代子 (2009) 「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社, 13-49
- 間瀬茂夫 (2009) 「説明的文章の読みにおける「論理」の再検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』58号, 103-111
- 松本修 (2006) 『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館出版
- Campbell. K.K., S.S.Huxman. (2003) *The Rhetorical Act* 3rd ed. Belmont: Wadsworth. 奥田博子訳 (2009) 「どのようにレトリックを批評するか」鈴木健・岡部朗一編『説得的コミュニケーション論を学ぶ人のために』世界思想社, 98-114